

山と博物館

第47巻 第9号 2002年9月25日 市立大町山岳博物館

特集 企画展 対山館と百瀬慎太郎展 (10/5～12/15)

— 岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る —



昭和16年7月15日の対山館 (百瀬堯氏所蔵)

「対山館と百瀬慎太郎展」の開催

「今日の国鉄大糸線のいまだなかつた明治、大正初期の後立山方面への登山者は、松本か、明科から乗合馬車で大町に入り、対山館を根拠にした。もともと白馬岳だけは四つ谷に古くから白馬館があって、白馬尻の岩小屋に一泊して登るのであったが、その他の日数を要する縦走の準備はみな対山館で調えるのであった。登山者の計画に従って案内人の選択から食糧、草鞋、カンジキ、杖に至る一切の準備を手際よく整え登山隊を送り出すのも彼であった。また山から帰って疲れた腰を対山館の広いあがりがまちに下ろすと、濯ぎの水を入れた盥を持って来てくれたのも彼であった。後年私はスイスのグリンデルヴァルト村のアドラーという宿に逗留したことがあるが、その宿のボス氏も同じように温かい人であった。彼はスイス一流のホテルマネージャーであったが、このとき私は慎太郎さんも世界的水準のマネージャーだと想ったのであった。アルプス登山史上、大きな寄与をなしているツェルマットのホテル・モンテ・ローザのあることは周知のところであるが、対山館は日本アルプス登山史上、これにも比すべき業績を持つものと思う。たゞホテル・モンテ・ローザは現在も登山者の根拠となつてはいるが、交通の発達により大町が多くの登山者にとって通過地と変化したことはやむを得ないことである。大町が登山者によって最も賑わつたのは、明治末期から大正初期であったと思うが、その頃すでに対山館は大沢に小屋を建て、昭和に入つて更に針ノ木に小屋を建て登山者に便宜を与えている。また大町に登山案内人組合を大正年代に組織したのも彼であり、同種組合の草分けであるが、彼の指導の下に優秀な案内人が育成され大町案内人の名を高めたのもそのころであった。」

横 有恒 『百瀬慎太郎遺稿集 山を想へば』(一九六二)

「序にかえて」より抜粋

慎太郎生誕一一〇周年・大町市山岳文化都市宣言元年のこの年に、百瀬家はじめ多くの皆様のご協力により開催いたします。多くの未公開資料から岳・大町・対山館・慎太郎が結びついて花開いた登山文化の原点に思いをはせていただける企画といたしました。半世紀以上の時を越え、本企画展が現代に通じる示唆深い場となります幸いです。

ご高覧のほどお願い申し上げます。

(大町山岳博物館)

對山館の時代とは何だったのか(前)

峯村 隆

はじめに

「終生、大町を出なかつた慎太郎さんは、明治、大正、昭和の転変の激しい時勢を、山紫水明の故郷に住んで、静かに眺め、考え、じつと自らを守りつづけた心底から男らしい生涯を送った人であった。彼は幼少の折の火傷のために隻眼であった。晩年の彼は瘦きすの体と輪郭の明確な美しい顔貌に寂しさを含んで、宛ら運命に耐え、孤独に徹した人物のように思われた。彼の家業は對山館の名で知られる旅宿業であった。この家業は先代から引き継いだものであったが、本人の好むところではなかつたようである。この自分の職業にむしる批判的であった彼は、打算に疎くその深い教養によつてかえつて広く多くの友人と交誼を得たと思う。明治から大正へかけての登山の中心地としての大町のその中心は對山館であり、またその對山館をして人口に膾炙せしめたものは彼であった。」

横 有恒 『百瀬慎太郎遺稿集 山を想へば』
(一九六二) 「序にかえて」より抜粋

また横は、周到綿密で親切な扱い・わが国初の登山案内者組合の創設と優れた案内者の養成・登山案内所の開設と優れた案内者の業績を高く評価して「近代的登山の潮の波頭に立つて、登山者に与えられた恩恵は単に職業上そうであったというには余りに大きい陰の力であった。であるから私はこの時代の一面を對山館時代と称しても過言ではないと思うのである。」とも述べている。(*)



百瀬金吾 (百瀬堯氏所蔵)

江戸時代の加賀藩の御縮り山(入山禁止)政策を反映する黒部奥山廻り役の国境巡視、さらに明治初期の野口村・飯島善造らによる信越連帯新道(針ノ木新道)の開通と挫折など、興味がつきない。

ここでは「對山館の時代」をキーワードとし、その時代を創設の明治二十年代から廃業の昭和十八年までのおよそ五十年間と設定し、本企画展のいくつかのテーマに沿つてその意味を探つてみたい。なお企画展のタイトル同様、引用文をのぞき創設当初の旧字名称を尊重して「對山館」と表記する。

對山館誕生前史

いにしへの針ノ木峠

針ノ木峠はドラマチックな歴史と伝説に彩られている。

昔も今も北アルプスが信州と越中・長野と富山を隔てる要衝であることに変わりはない。それでも大昔の人々は山々谷々に分け入り、最も合理的な歩行ルートを探し求め、針ノ木峠を見つけたはずだ。一説に、それは立山信仰の最初の流行期、鎌倉末期から室町時代のことで、すでにそのころから裏参道として、また交易ルートとして踏まれるようになったともいわれる。その後天正十二(一五八四)年真冬の富山城主・佐々成政のさらさら越え、

千国街道 大町宿

一方、糸魚川と松本を結ぶ主要道、千国街道(糸魚川街道なども)は後に塩の道と称されるように、かつて牛馬の背やボッカ(歩荷)による塩や海産物、内陸の特産品の輸送でにぎわつた街道であり、大町宿はその間の一大中継地でもあった。さらに大町からは北東や東へと善光寺道・戸隠道・山間の村々への道が伸びていた。

つまり大町は江戸期に西の針ノ木峠道の通行を表向き閉ざされていたとはいえ、歴史の大局から見れば北アルプス周辺地域の中では数少ない四方の人と物と文化の交差点、合流点だったと考えることができる。(*)

問屋取次業と百瀬家

百瀬家は屋号を今(やまちょう)といい、少なくとも江戸時代以来の旧家であり、いつのころからか問屋取次業を営んでいたと伝えられている。これは文献に見出せない言葉であるが、字句からすれば物資や情報の流通を円滑にするための仲介が主な仕事だったと想像できる。当主は代々新右衛門を名乗っていた。江戸後期(一八〇〇年代前半)には下中町(現下仲町)から八日町通り、塩問屋田(かくひら・現塩の道博物館)の西隣に移り店をかまえていたようだ。(*)

新右衛門新栄またはその一代前に明治の御世を迎え、その後も商いは順調だったと思われ。ただ新栄は子に恵まれず、二十ほども歳の離れた弟金吾を跡継ぎとした。



斎藤謙一郎 (百瀬堯氏所蔵)

ところが明治二十二(一八八九)年十一月二十四日深夜、近所から出火した火の手がみるみる八日町通りの家々を焼きつくし隣町へも類焼するという大火災に見舞われ、今も炭灰と化したのだった。新栄が五十・金吾が三十歳前後の時の災難だった。

金吾はこのときすでに商いの実務に采配を振るっていただろうがまだ若く、旅館への転業とそのため新築を決断したのは新栄だったと思われる。

對山館の誕生

間口八間奥行十二間・切妻白壁総三階建。広い屋根裏(四階)まで吹き抜き、城の天守閣のように大胆に階段と回廊を配した特異な和風設計だった。当時の大町の町場の家は背の低い切妻の平屋が普通だったから、これは頭抜けて目立つ建物だった。着工は二十三年春として完工には長い年月を要したと思われる。

ウェストンは明治二十六(一八九三)年八月、針ノ木峠越えのために新町ですすめられて初めて今に宿を乞うた。亭主は「不承不承頼みを入れてくれた。彼は何もおもてなしするものにとごさいませんと言った。(中略)私を階上に導いてくれたが、そこには鉄鎚や鋸を使う音がして、大工たちが働いてい



7歳ころの慎太郎 (百瀬堯氏所蔵)

るのだった。またそこには「大名にもふさわしい」できたての二十七畳敷の室があり、畳には一点のシミもなかったこと、多くの泊まり合わせの客がいたことも記している。工事と並行して営業していた当時の様子が目に浮かぶ。(※4)

問屋取次の商いは、物とともに人の出入りも頻繁で、あるいは宿泊の便もはかっていたのではないか。だから旅館への転業は先を見越した無理のない英断だったのではないかとの見方もできる。(※5)

いずれにせよ明治二十年代中ごろには今旅館は誕生し、金吾の才覚と人当たりのよさによって人気を増していく。

なお「對山館」は誰の命名で実際いつから併用されていたのか、その来歴は判然としな

ともに現存している。(※6)

雲坪の表額に今のところ「對山館」の謎を探るばかりである。

對山館と慎太郎

慎太郎 生いたちとあこがれ

百瀬慎太郎は明治二十五(一八九二)年十二月十日、父金吾・母万世の長男として生まれた。戸籍上の名前は真太郎である。万世はかつて松本藩の典医を務めた六日町の斎藤文毅の娘である。慎太郎はまさに對山館とともに産声をあげたことになる。

初めて男児を得た金吾夫妻、そして誰よりも新栄が直系の総領の誕生を喜んだはずだ。しかし慎太郎は二歳にして運命的な出来事の渦中に這い込んでしまう。

明治二十七(一八九四)年十二月のある日、慎太郎をあやす子守に魔がさした。フンゴミ茶屋(※7)で一時目をはなした隙に、慎太郎は囲炉裏の煮え湯をかぶり、全身に大やけどを負ったのだ。

万世の兄で医師、斎藤謙一郎の親身の手当てと斎藤家秘伝の膏葉の甲斐あって、致命的と思われた全身やけどは快癒した。ただ右目だけはこのときから永遠に光を失ったのだ。

この年の七月にはウェストンが白馬登山の帰途、對山館に二度目の宿泊をし、十月には志賀重昂が、後に信仰を別とするわが国初の登山ブームの導火線となる『日本風景論』を著している。

「私の母は、父が漢方医であった故か、子供の私によく漢詩を誦して聞かせた。「国を去って三巴遠し。」といふ唐詩選の詩句を低吟して、おそらく意味の解らない詩の朗読を



河野齡蔵 (百瀬堯氏所蔵)

また十歳ころには子ども向けの質の高い雑誌『少年』(時事新報社刊)を教師から見せられ刺激を受け、若き思想家ともいえる同級の内山重助とも親しくなり、後にロシアなど海外の文学や思想にもなじんでいく。いわば鄙にはまれな先進の文学少年・青年となつていったのだ。これは江戸後期生まれの金吾にとつてあまりうれしくないことだったろう。

だが右目を失明させてしまった負い目から、慎太郎に強く今新右衛門的な生き方を強要することはできなかつたろうし、高価な本の入手など、慎太郎のわがままもかなり容認していたと思われる。

明治三十九(一九〇六)年八月、大町中学二年生、十三歳にして年上の友人三人と初の北アルプス、白馬岳に登り「高山の雄大な景觀に魂をうばわれ」「病みつき」となり、「それから毎年、ある年には三回も此の白馬だけが山であるかのやうに登らずにはあられなくなつた」。翌年には画家丸山晩霞とも白馬行をともにしている。この最初の登山で、世話になつた白馬鉱山事務所の佐藤工学士が前年十月にできた日本山岳会の創設発起人のひとり城数馬の友人だつた関係で、事務所に贈られてあつた日本山岳会の機関誌『山岳』第一年第二号を佐藤からもらい、以降購読し続け、また翌年からは、やはり日本山岳会の生みの親のひとり、小島鳥水の『日本山水論』『山水無尽蔵』等々を取り寄せて読みふけるようになる。(※8)『山岳』にせよ鳥水の著作にせよ、中学生には相当高級で難解な本だつたはずだ。

慎太郎は日本山岳会の誕生、つまりは日本的近代登山の黎明期に、急ぐように山に魅せられ、心酔しはじめたのである。明治四十二

年八月、十七歳に満たない若さで日本山岳会入会・会員番号二一五番。

さて中学時代に山と山岳文学に親しんだ慎太郎は、卒業後の進路について父や母と理解を深めることなく、二高（後の東北大学）受験のため仙台に赴く。しかし途中で使いの者に連れ戻されている。（*10）なぜ大町を出て二高でなければならなかったのか、その真意は不明だが、おそらく文学・山・家業の間で悩み、文学の道に走ろうとしたのではなからうか。

明治四十三（一九一〇）年三月、大町中学校卒業。忸怩たる思いを胸に、對山館にとどまる。

慎太郎 人の山脈（一）

大町に戻された慎太郎の生きがいは、もちろん山であつたらう。

「山岳夜話」のなかで慎太郎は「私の山への思慕を導いてくれた最初の恩人である様に思はれる」と辻村伊助を語る。

辻村は明治四十二年、まだ東大農芸化学科の学生だったころに初めて對山館に泊まり針ノ木越えの立山登山をしている。後に名著「スウイス日記」（一九三〇）を残す慎太郎より六歳ほど年上の青年であつた。慎太郎の記憶によると辻村の對山館宿泊はほかに明治四十



辻村伊助（百瀬堯氏所蔵）



慎太郎（左）と短歌を愛好する中学の同級生たち（百瀬堯氏所蔵）

四年と大正元年の三回だけだというのが、人生の最大の岐路で辻村に出会い、その気質や教養、そして何より山への純粋な姿勢に接し、大いに力づけられ、心のなかで山と人と對山館と自己との整合が保たれていくようになってきたようだ。文学青年の間ではやりだした短歌を中学の同級生とともに作り始めたのもこのころで、明治四十四年には若山牧水の門下生になっている。（*11）

「私の宿屋家業に得た有難さは、明治末期から恰度日本の登山の勃興期からの数多くの岳人に親しく接し得られたといふのが唯一のものであつた。それ故、私の思ひ出は山であり人である。以前に私は山を想ふということは、それに関連して人を想ふことだと云つた事がある。山に憧れる人に私は憧れて来たと言つても良い。そしてそれ等の人々は真に好い人ばかりであつた。いつとはなしに山によつて結ばれてゆく友情を有難くこよないものと思ひ決めるのであつた。今も尚此の友情がなかったなら、私は生きるかひもない索然たる境涯に堪へられないであらう」（「山岳夜話」と晩年に吐露した心境のルーツはここにあつたのかもしれない。

明治四十三年新雪の十月、黒部の主たる遠山品右衛門とその子十郎に伴われて初めて

針ノ木峠を越え黒部川を往復する。「白沢から上は道らしい路もない沢伝ひであつたが、所々明治の初年の加賀街道の名残の痕跡が雪溪の左岸に残つてゐた。峠の上に立った気持は寂寥そのものであつた。その寂しさが他では味はれない魅力のように思はれた。」（*12）

針ノ木との出会いもまた、このときだったのである。（つづく）

（*1）「信濃支部報」第三号（一九四九）

（*2）相澤亮平 本企画展解説（二〇〇二）より

（*3）相澤亮平 本企画展解説（二〇〇二）より

井垣美和氏（慎太郎次女）談（二〇〇二）

（*4）ウエストン『日本アルプス』岡村精一訳（平

凡社刊）

北沢勝二「仁科路第三十二号（一九八二）

参照

なお、この「亭主」は「金吾」が通説だが

「新栄」の可能性も高い。新栄から数えれば

慎太郎は三代目對山館主となる。

（*5）飯島喜久代氏談話（二〇〇二）

（*6）前者は百瀬堯氏（慎太郎内孫）所有・遠藤

三春氏（慎太郎三女）蔵、後者は大町山岳

博物館所蔵

（*7）下足を解かず利用できる茶屋

（*8）百瀬慎太郎「憶ひ出断片」（一九三七）

（*9）百瀬慎太郎「山岳夜話」（一九四八）

（*10）井垣美和氏談（二〇〇二）

（*11）石原きくよ「山を想えば人恋し」（一九九三）

参照

（*12）百瀬慎太郎「針ノ木峠雑談」（一九四八）

（大町山岳博物館学芸員）

企画展「對山館と百瀬慎太郎展」のご案内

■会期 十月五日（土）～十二月十五日（日）

休館日 十一月五・十一・十八・二十五日

十二月二・九日

■観覧料 常設展とも通常料金

■内容 左記テーマにて

○對山館誕生前史

・針ノ木峠の歴史・千国街道と大町宿

○對山館誕生

・問屋取次業と百瀬家 など

○對山館の黎明・南画家長井雲坪と對

山館とのかわり など

○對山館と慎太郎

・五十分の一對山館再現模型・おいたち

と人々との様々なかかわり・山と慎太

郎・慎太郎の知られざる側面 など

○大町登山案内者組合

・大正昭和初期の登山事情・案内人と案内者組合・案内人の仕事 など

○對山館その後

・戦争と對山館・大町山岳会のあゆみ

ほか、對山館と慎太郎にかかわる映像・肉

筆原稿・蔵書・色紙・短冊など多数

■なお、開催にあたり企画段階から準備まで

飯島喜久代氏・大町市文化財センターの相

澤亮平氏・清水隆寿氏にたいへんお世話に

なりました。記してお礼申し上げます。

山と博物館 第47巻 第9号

発行 〒 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―一三二一〇二二
FAX 〇二六―一三二一〇三三

印刷 大糸タイムス（株）

定価 年額 一、五〇〇円（送料共）（切手不可）

郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七二一三三三